

愛と暁の詩 : 吉本隆明『転位のための十篇』論(後)

川鍋, 義一 / KAWANABE, Yoshikazu

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

51

(開始ページ / Start Page)

163

(終了ページ / End Page)

168

(発行年 / Year)

1995-03-24

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019817>

愛と暁の詩

——吉本隆明『転位のための十篇』論（後）——

川鍋 義一

『転位のための十篇』をつらぬく三つの軸——〈廃人〉〈連帯〉〈現在〉、その三つめではじめて見えるほとんど不可能な光について述べ、「審判」というもつとも芸術的な価値の高い作品に即して『転位のための十篇』のたたかひの過程を遠見したい。

4 遠い友へ

三つめの軸である〈現在〉、ここでは遠くにある〈彼〉のたたかひが〈私〉の心をゆさぶる。〈現在〉はすでに私たちが見た以上のことをなにも映さない。〈彼〉は友であるという考えもいままでの議論をはみ出さない。ただひとつ、〈彼〉の存在が可能性であるという考えを除いては。それは「一九五二年五月の悲歌」でうたわれている。この一点によって〈現在〉はひとつの軸として措定される。

「死者へ瀕死者から」も「一九五二年五月の悲歌」もともに、〈私〉の努力は現実から与えられる衝撃を内在化し、〈人が死んだ〉という、それ自体としては〈世界〉にすこしの波動も伝えないようなできごと

を、それ以上の、なにかがそこに凝集した事件へと昇華させることに集中している。〈私〉は一九五二年五月になにを見たのか。さわやかな五月の青空に秋を見てしまう〈私〉の本質を問わねばなるまい。初夏の〈世界〉に秋を見る〈私〉の考えをここから拾いだしなければならぬのである。

瀕死者である〈私〉は死者である〈彼〉へ共感をあらわす。「瀕死者」とはなにか。瀕死者は死に近く死の安息を得られず、死に近く生を求めて得られない。であれば瀕死とはすなわち〈廃人〉としての〈私〉の在りかたを象徴的にあらわすことばであるとも言える。つまり〈連帯〉を求めて〈同胞〉に拒絶されたことに〈廃人〉の生の過程が象徴的にあらわれているのである。

〈彼〉の死になんらかの意味が与えられるのは、〈私〉の〈現在〉に対する認識が〈彼〉の死とある接点をもつときである。死は他者の理解を拒絶する。〈彼〉はたたかひ、〈彼〉は〈秩序〉に殺された。そのことだけで、しかし十分だと思われたはずだ。困難なたたかひへの意志を捨てなかつたこと、そして〈私〉の敵と同じものに殺されたとい

うこと。共感よりもっとはげしいものが突き上げ、〈私〉は〈彼〉の死に〈私〉の生と死を見てしまい、〈廃人〉、すなわち瀕死者である〈私〉もそこから逃れられないであろうということを絶望的な衝撃のうちにたしかめたのである。町は平穏で〈私〉にはこの平穏さが理解できない。

「一九五二年五月の悲歌」の「青空」はその違和感を出したものだ。「ぼくの窓」は「無数の窓」のひとつであり、おそらくは夕暮れ時の人波にのみこまれる果敢ない存在であり、ビルのなかへ消えてゆく帽子のひとつである。〈私〉もまた青空を見ているはずであり、すなわち本質の見えにくくなりがちな情況に生きていることに変わりはない。わずかな、けれど本質的な〈私〉と人々との違いは、黒布をたれているかどうかであると〈私〉には信じられた。〈私〉に対する〈私〉の視点はここに転換する。人々には青空はそのまま平穏な情況のあらわれであるが、〈私〉には見かけ上の様態である。

「黒布」はなにについての悲しみをあらわしているのか。〈私〉は〈彼〉の死を悲しんでいるのか、それとも〈私〉自身のために嘆いているのか。ひとつだけ言えるのは、物理的に遠いところにいたはずの〈彼〉と〈私〉のあいだには現実的なかたちにはならない関係性があつたということである。

第五連をさかいとして「一九五二年五月の悲歌」はダイナミックに展開する。そこに描かれているのは、「それでも」たたかきを止めない人間の意志の力である。〈彼〉の存在はまた、遠くでたたかっているであろう人々の存在を予感させる。そしておしみなない共感と、きみたちはおれの友であるという〈連帯〉感を表出する。これらすべては悲惨な死をとげた〈彼〉への哀傷が切りはなせず裏側にかくされていると

しても、この意志の力が前面に出ていることによって前半と後半はへだてられる。

ここでもっとも特徴的なことばは「星」である。「ぼくのしらないひとたちがアジアのどこかで／銃床と星とを繋ぎあはせる」。「しらない」をめぐって思い出されるのは「廃人の歌」の「ぼくはぼくのこころがないあひだに 世界のほうぼうで起ることがゆるせないのだ」であるが、「一九五二年五月の悲歌」では「とぢられたぼくの眼は永遠を約束されないけれど／むすうの星がぼくの精神のゐないあひだに生れ／ぼくのゐないあひだに薄れる／それだけがぼくの夕べと夜との説話だ／ゆるされた明るい可能だ」とうたわれる。「一九五二年五月の悲歌」の〈私〉は〈私〉と未知のだからのために小さなうたを捧げようとしている。ここに「廃人の歌」と同じく暗く、しかし触れる者すべてを傷つける凶器のような性質のない第一の理由がある。

つぎに希望と可能性について考える。これが第二の、そして本当の理由だ。星はいまだだれもつかむことのできない新しいなにか、そして人間がこれからつかんでゆこうとするなにか、である。それを希望と言おうか、夢と呼ぼうか。暗さの支配するなかで〈私〉は安易に未来をうたいはしない。けれども〈私〉のかわらないところで、だれかがいかなる理由があつてか、そしてどのようにしてか、たたかい、なにかをつかもうとしている。これは可能性である。遠いということによって遠い友は、また友たちのたたかきもひとつの抽象である。それでも〈私〉が友たちのたたかきに〈私〉自身のたたかきを投影している以上は友たちの顔はすなわち〈私〉の苦闘する顔であり、同時に友たちの心象風景は〈私〉のそれと質的に等しいと信じられたに違いないのである。死んでしまった〈彼〉も、だ。私たちはここで「火の

秋の物語」の「ユウジン その未知なひと／いまは秋でくらくもえてゐる風景がある／きみのむねの鼓動がそれをしてゐるであらうとしんずる根拠がある」を思いだすこともできる。

困難のなかでひとだけ掘りおこした可能性によって前半の暗さとはまた違ったものが湧きだしてくるが、それでも〈私〉は安堵と、欺瞞のうえに手をつなぐことを拒否する。

5 ぼくたちを裁いてみよ

「審判」は死を基調としてこの詩集の重要な問題のすべてを包摂している。どの詩にも、いままで見てきたように死は影を落としているが、ここで死は秋に結びつけられ、そこから一編の詩ははじまる。

〈私たち〉の歩む道には苛酷が刻みこまれている。亡霊となって歩いているのか。〈私たち〉の進むべき路上には熱狂も沈静もない。それは多く〈私たち〉の本性に発している。まさしく〈私たち〉の路上を照らすものは秋の病んだ太陽であることこそふさわしい。苛酷は〈私たち〉からはじまった。〈私たち〉は、意志ほどの大きさをもたない〈私たち〉の、その背後にある死の影を、やがて訪れる〈世界〉の破局とともに予感する。太陽が〈私たち〉の暗い予感のとおり、そちらの方向に落ちてゆくように見える。予感であるのか。〈私たち〉の病氣による錯覚であるのか。いずれにしてもこれが〈私たち〉にとつての唯一の現実である。病んだ明るさはその内包する必然性にしたがつて落ちてゆくしかないと思われた。

〈私たち〉の予感する終末が近づいてくれば、〈私たち〉のたたかいてもそれといっしょに影になってゆく。そのたたかひのうしろに隠され

ている、小さな羞恥、愛、意志といったものもそれにしたがって意味は輪郭を失い、やがて残滓すら見つけられなくなってしまう。たたかいの背後の小さな蹉跌が失われるということは、そのまま〈私たち〉のたたかひがあやうくなり、〈私たち〉に死が近づいてくるということの意味する。〈私たち〉のたたかひは〈私たち〉が死んでのち、どこかで引き継がれるのだろうか。〈私たち〉はそれにかかわることはできない。

生まれてきたことが〈私たち〉には刑罰である。けれども刑罰はそれと意識する者にとつてのみ刑罰である。生が苛酷である程度に依じて、そこからつかみだした認識は普遍性をもつものに見える。〈私たち〉は盗賊であり殺人者であるらしい。〈秩序〉と法が、〈秩序〉を内在化させた〈同胞〉が、そしていままで出会った〈世界〉がその罪状を負わせる。〈秩序〉が強盗と殺人を行い、しかもそれが正義として浸透しているところでは、それに根源的な疑問を抱く者は破壊者である。心情を〈秩序〉と同じ型にして、そのなかでのみ許された自由を本質的な自由のように考える人々には〈私たち〉の投げかけるへでもきみたちは現実的な関係のうえではおれたちに近いものであるのだ」ということばなどは理解できない。奪われた者と奪われない者とを分けることが空しいと認識されるかげにはどうにもならない人間の心情の相対性に対する実感がかくされていた。(註4)

〈私たち〉にとつての牢獄であるこの〈世界〉を、しかし〈私たち〉は愛する。愛は〈私たち〉のたたかひが〈秩序〉の言う破壊ではないことを保証する。愛とたたかひの可能性はどこにあらわれるのか。この困難のほかにはない。〈私たち〉のたたかひを追求、深化してゆくことのほかにはない。可能性が未来としてあらわれてくるところにだけ、

「私たち」のたたかいは終末をむかえることが許される。「どんな可能もぼくたちの生を絶ちきることなしにおとづれることはない」ということは肯定的な文脈でとらえられるべきだが、異常なほどの緊張の高さと意志の強さとそれらの背後の暗い予感とを感じさせる。

第四連の強い意志の表出は、やがて、私たちの敵への憎悪と言つても足りない、単に嫌悪でもない。へおまえたちはおれたちによつて殲滅される」という重く鈍く響く宣告へと移つてゆく。私たちはいま法廷に在るのでと仮定してみる。そこで私たちのたたかいをすべて無言のことばで語るだろう。しかし、莊嚴さを装つた法廷で、私たちの重いたたかいはその本質を黙殺されたうえで裁かれる。弁護人はない。いや、現実には弁護人は過失であつた、または被告は反省していると言張するかもしれない。——私たちはそのことをすべて知っている。私たちの生で見た愚劣は法廷でも同じことだろう。私たちは申し立てる。私たちのたたかいは世界の原理とは別の原理によつて運動するものである。そして私たちの病理を裁いてみよと。それは私たちのたたかいは多く私たち自身の病理すなわち私たちの根源の在りかたからはじまつてゐるからだ。しかし私たちはついににはなにやらわけのわからないことを口走る頭のおかしい犯罪者に過ぎない。頭がおかしい——だから彼らには清潔なベッドと休息が必要なのだ。ここには私たちと世界の初源にして最後の在りかたが定着されている。

私たちはいつも孤独にたたかつてきた。病んだ現在、かくれようとする現在をだれかともたれあわずに孤独に見つめてきた。そして孤独が悪夢のように襲いかかるときでも、異質の思想とは安易に手をつながない。私たちの思想だけが真実であると信じられたか

らであり、安易に手をつないで和解することは私たちが私たちであることを自ら放棄することだからである。連帯を求めるときでもその苛酷な心のかたちを変えない。私たちのたたかいはいつも孤独のなかにあつた。世界の破局も、世界からの恩恵も、私たちにはかかわりのないことであると言ふのは、このたたかひの苦しさに裏打ちされてはじめて、局外からの論断ではなくなるのである。

6 結言にかえて

『転位のための十篇』は、個人を共同性のなかにあるものという側面からとらえ、個と共同性の相互の作用と反作用の限界のかたち、さらに苦闘のなかで決してひびを折らない在りかたを描きだし定着した。ぎりぎりのところで価値を構築し、そのために、読む者にもつとも強く震撼を与え、内省を迫るその部分が同時に大きな違和感を与える部分でもあるということになった。

たとえば小さなしあわせへの訣別という問題ならば、「ちひさな群への挨拶」の「あたたかい家」を宮城賢の言うように肯定的にとらえられるし（註5）、廃人性を秘したまま一個の市民として営む家庭というものも考えられるから、不可能を感じずることもない。また、「廃人の歌」の核心によつて自己の欺瞞を衝かれても、それは爽快な敗北である。自分が真実だ、という考えも、むしろこの地点は彼我の弁証法的な展開のためにはぜひとも欠かせないものであると言へる。

では「黙契」における「女」と「反逆の根つこ」の問題はどうか。「ぼくが罪を忘れないうちに」の「ぼくは ぼくの屈辱を／同胞の屈辱にむすびつけた／ぼくは ぼくの冷酷なところに／論理をあたえた」

(註6)の力を借りても、おそらくすでに述べた考えをこえることはできない。〈連帯〉の問題にしても、その厳密さと、〈廃人〉の原理から買われている、さすれば血の出るような論理性に圧倒されるが、この形態が本当に〈私〉にとつて唯一の〈連帯〉の形態だったとは言いきれない。そしてなによりも、個と共同性の関係をこのようにつきつめたところに、腹の底から伝わるような衝撃とどうしても消えない違和感をおぼえてしまう。(註7)

しかし一部は全体から切りはなされては存在しえず、ひとつの生は他の可能性の放棄と表裏する以上は、もつとも中心に位置するこれらの思想のうちの一部だけに異を唱えてみてもなにも言ったことにはならない。このいま手もとにある『転位のための十篇』以外に『転位のための十篇』の〈私〉の生はありえないのだからそれとして受け止めるよりほかはない。その違和感の拠つて立つものを掘りあてるという課題が残るだけだ。

もうひとつ、『転位のための十篇』の表現の問題と、この文章で採用した方法について述べておきたい。第一に十編の詩の配列である。これが単なる寄せ集め以上のものであるのは、「火の秋の物語」にはじまり「審判」におわることに象徴的にあらわれている。詩集全体の基調である秋から冬へという「季節」がある予感として与えられ、最後に「審判」が『転位のための十篇』のたたかひのすべての過程を映しだす。その間の『転位のための十篇』内部の運動、いわば『転位のための十篇』の転位を配列の順に追えば、たたかひの根底にあるものの解体、そして〈同胞〉のなかでのくるしい孤立、訣別、そして遠くにもある悲惨と、そこからなんとか掘りおこそうとする希望——という具合になり、おおむねはじめに設定しておいた三つの軸と対応する。「廃人の

歌」「絶望から苛酷へ」はこの配列を乱して論じているが、その理由は本文中に述べてある。

第二に、表現の仮構性的の問題である。これは第一の点と本質的にかわる。十編の配列と、それから「火の秋の物語」「絶望から苛酷へ」「審判」の内容にもつとも特徴的にあらわれるように、『転位のための十篇』は現実の徹底した再構成を行っている。私たちの目のまえに展開するドラマはまさに思想のドラマとでもいうべきものであって、〈世界〉と〈私〉の作用・反作用と、そこから意味を抽出しようとする〈私〉の苦闘、抽出、定着された意味が日常の像を比較的喚起しやすいレベルで描かれている(『固有時との対話』との違いは歴史的現実との対話)(註8)の有無よりは像のレベルでとらえられるべきだろう)。おそらく作者は自分にとつての〈本当のこと〉というカオスを〈私〉の造形をするなかで必死にときほぐしていたのである。当然、定着された〈私〉は、いまだ運動を続ける作者とは別の存在となり別の運動をする。そして作者と〈私〉が状況を徹底的に生きたことによつて、この詩集に摂取された情況は、それを描くこと自体が目的である素材であったり、単なる意匠であったりすることからそれだけ遠ざかり、また他者と内的に接触しない特定の情況という呪縛からも解放される。言いかえれば、定着された情況は、ただしく〈私〉と不可分の情況となり、その地点ではじめて普遍性の契機を得るのである(したがつて〈私〉を作者とも現実とも結びつけるには一定の留保が必要になる)。

『転位のための十篇』はすでに〈出会う〉準備のされていた魂を、作者の生活史や作品成立の背景についての知識の多少にかかわらず震撼する。これはひとりこの作品のみの特徴ではないが、『転位のための十篇』ではいま述べた二点の理由によつて可能になったのである。

いかに表面が政治くさくても「現実の反映が芸術である」（註9）ではなく「芸術が現実を反映する」（註10）という視座が結果としてつらぬかれていたために、リアリズムの文学ではないし、そのことがこの作品の大きな特質である。テキストをテキストに限定するというこの文章で採用した方法はその特質ゆえに可能であり、震撼のかたちを証するためこの方法で考察をすすめてきた。

結言とも言えない文章であるが、吉本隆明の他の著者を詳細に論じたうえで、この総論の部分はおぎなっていきたい。とくに『固有時との対話』『マチウ書試論』とのかかわりを追究するのが当面の課題であると考える。

『転位のための十篇』からの引用はすべて『吉本隆明全著作集』（以下『全著作集』）によった。

註

4 テキストには「奪はれたものと奪はれないもの」とあり、こまかい部分ながら解釈がむずかしいが、詩の文脈から「物」ではなく「者」にしておく。

5 『吉本隆明◆冬の詩人とその詩』（国文社）

6 「ぼくが罪を忘れないうちに」（『全著作集』一巻所収）

7 『共同幻想論』（禁制論）に、「人間の幻想の世界は、それが共同性として存在するかぎりには、個々の人間の〈心理的〉世界と逆立してしまう」とある。『共同幻想論』という思想ないし確信の根幹にもかかわるのだから、ことによらぬやむやにするわけにはいかな

8 『固有時との対話』「少数の読者のための註」（『全著作集』一巻所収）

9 「社会主義リアリズム論批判」（『全著作集』四巻所収）
10 同右

参考文献（引用したものをのぞく）

磯田光一・北川透編『鑑賞日本現代文学第三十巻埴谷雄高・吉本隆明』

（角川書店）

遠丸立『増補吉本隆明論』（思潮社）

付記・『日本文学誌要』（第五十号）発表の本稿前編の「4 ぼくたちのうた」を「3 ぼくたちのうた」に訂正いたします。

（かわなべ よしかず・博士課程二年）